

◆【海員随想】故郷讃歌② 口之津太郎

諫早を発し、やがて愛野。ここは、海に面して小高い丘の上に展望所があり、千々石湾と共に天草の島々を遠望できる。眼下の黒い砂の浜辺、それに沿う緑の防砂林、なぎさに寄せ返す白波と、点在する農家の屋根瓦の返す陽光の反射光が銀白色となり、緑麗しい田畑の輝きと共に視界に入る。遠くかすむ雲仙岳の雄峰の下に吸い込まれるような錯覚を感じつつ、長いスロープを下る。故郷への第2の関所ともいえる。

加津佐町の岩戸山を通過し、口加高校バス停の峠の頂である。千々石湾の延長と、白い砂浜、潮流うず巻く早崎海峡と、その中に突き出る瀬詰崎の灯台の白さ、背景の薄緑の天草の島々の織り成すハーモニー。目を左に転ずると、口之津の港がその水面静かに在り、島原の乱にて有名な湯島と熊本の山並を遠望する。帰省の感、最高潮に達する時である。

帰省 2 日目には、単車にて島原から雲仙に登る。山間の緑の木々を縫って走る塗装道路のセンターラインの白さが目に沁み、流れる風が若葉の香りを運び、肌にさわやか。全く無抵抗的に、五体をもってこれら自然の恵みを受け入れることのできるのが無性にうれしい。

仁田峠の展望台から広がるすそ野、眉山、有明海を望み、お山の大將われ独りの悦に入る。大洋の荒波に、時として恐怖におびえる時であっても、陸への憧れの気持ちが高じて、やはり海とのつながりは切れない。帰省の喜びは、良き故郷の自然豊かなる地において新しい英気の湧くのを、そしてこれまでのストレスの発散を温かく吸収してくれるのを、強く自覚しているからにほかならない。麗しく、愛しいほどのこの大地と共に、無言の対話のできることの幸せは、今の私にとって何物にも勝るものである。人間など、この大自然の中で、実に小さいものである。人間として自然に順応してこそ本物で、われわれの日々の生活の中に自然を順応させようなど、またそれができると考えるからして、現今のもろもろの問題が発生するのではないだろうか。環境汚染、その他公害問題等、つきつめるとわれわれ人間が人間としての領分を忘れ、不届きにも自然へ悪辣なる挑戦をなしたためのシッペ返しではないのだろうか。

人間の介在を許さず、人間によって変化されることのないことで、初めて自然なのであり、自然に順応すべきことが、生きとし生けるものすべての本分ではないのか。

雲仙岳の緑の木々が、有明の海の青さが、若芽揺らぐ瀬詰灯台の下清流が、野母崎をあかね色に染めて沈む夕日が、いつまでも変わることなく、われわれの心をなごませてくれることを願うと共に、それを守るがために人間としての領分の中で、自然に抱かれて生きていきたいと思う。

「海員だより」